

Q&A

自然消退後に再燃を繰り返した肝腫瘍

解答：

肝炎症性偽腫瘍

解説：

肝炎症性偽腫瘍 (inflammatory pseudotumor ; IPT) は、病理学的には線維芽細胞の特徴を有する紡錘形細胞の増殖と、リンパ球や形質細胞からなる炎症細胞浸潤による腫瘍様の病変の総称である。Zen らの報告¹⁾によると、肝 IPT は fibrohistiocytic type と lymphoplasmacytic type に大別される。近年注目を集めている IgG4 関連の肝 IPT の多くが lymphoplasmacytic type に相当すると考えられ、IgG4 陽性形質細胞の高度浸潤と閉塞性静脈炎を特徴とし、ステロイドが著効するケース

が多い。肝 IPT の画像所見は炎症細胞浸潤と線維成分の割合、出血、壊死の程度などによって多彩な所見を呈するため、画像所見での確定診断はしばしば困難とされる。

本症例は前医における臨床経過で抗菌薬が無効であり、また自然経過で肝腫瘍が消失したことから、肝膿瘍や悪性腫瘍などは否定的と考え、肝 IPT を第一に疑った。肝腫瘍はソナゾイド[®]造影でも超音波での局在診断が困難であり、確定診断目的で CT ガイド下生検を行った。病理学的にはリンパ球を主体とした炎症細胞浸潤を認める lymphoplasmacytic type に分類される肝 IPT と診断されたが、形質細胞はごく少数であり IgG4 陽性形質細胞も明らかではなかった。前医での臨床経過

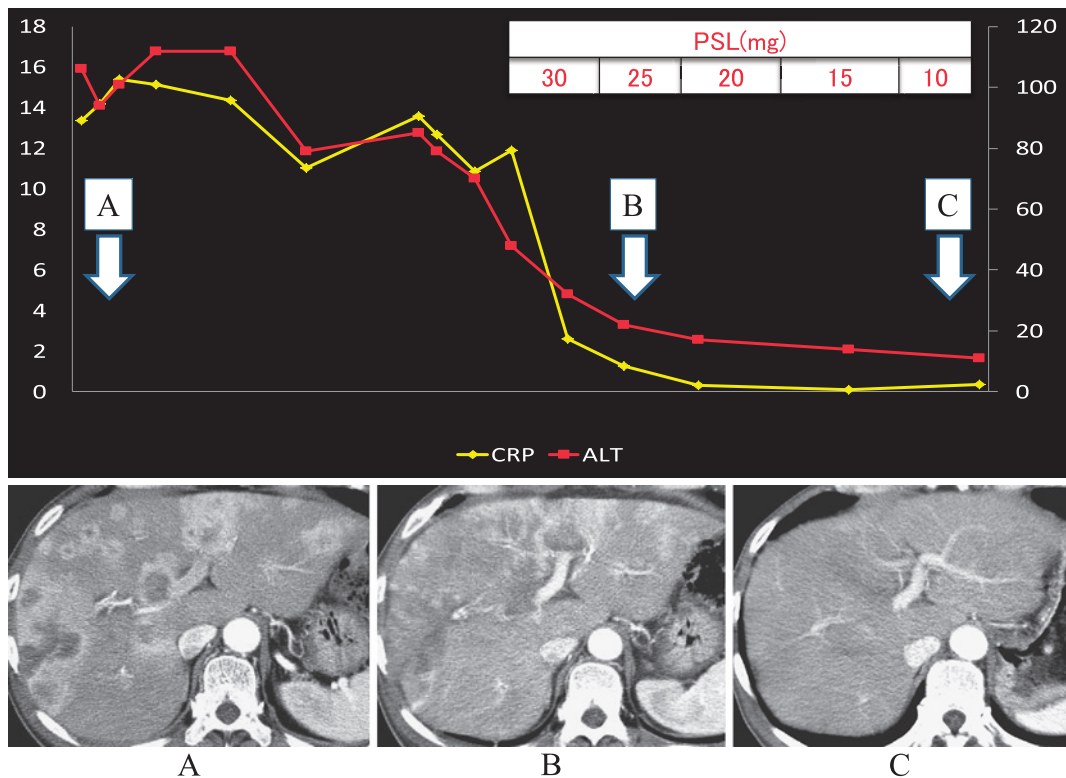


Figure 2.

